

2023 年度Ⅱ期 グループ企画

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1_1	K・I	マヒドン大学医学部	タイ	2024/2/29～2024/3/4
1_2	H・A			
1_3	T・T			
1_4	O・Y			
1_5	I・G			

国際医療研究会マヒドン大学交換留学の報告書
2024/2/29~2024/3/4 Mahidol University

大阪大学医学部医学科 4 年 K・I

1.概要

2/29 スワンナプーム空港到着、チェックイン、歓迎会(脱出ゲーム)

3/1 午前回診による病棟見学、手術見学、MIND Center 見学&ショートレクチャー、AIMC 見学、サイバーナイフ見学

3/2 バンコク市内観光(Wat Jang、Museum Siam、タイ王宮、Asiatique the liver waterfront、アイコンサイアム、タイ古式マッサージ、中華街)

3/3 パタヤ観光(ビーチ、ガチョウに餌やり、カヤック・バナナボート体験)

3/4 OPD 見学、CNMI 見学(シミュレーションを用いた医学教育体験)、送迎会、スワンナプーム空港出発

3/5 帰国

2.目的

マヒドン大学の研究施設及び病院を見学することで、日本とタイの医学教育や医療システム、医療の実情と課題に関する共通点、相違点を学ぶ。現地の学生や教員との交流、観光を通して自国とは異なる文化や価値観を学ぶ。英語でのコミュニケーションを行うことで国際的な視野を持つ。

3.活動内容

①回診による病棟見学

重篤ではない患者が主となる救急のフロアを責任者の医師に同行して回診を見学した。多発性骨髄腫やスティーブンソン症候群、せん妄、CKD を患う患者などがいた。一人ひとりについて病状や背景を英語で説明していただいた。レジデント 1 名とフェロー 1 名も同行した。タイではまだ電子カルテがそれほど普及しておらず、特に外来患者を主として紙面によるカルテが主流とのことであった。一人の患者に対してカルテファイルが何冊にもおよぶことがあり、バイタルのグラフも手書きでとても大変と実物を見せていただきながら説明された。電子カルテの利便性を改めて感じた。

②手術室見学

ファイファー症候群という頭蓋骨が早期に癒合してしまうことで、脳の成長とともに頭蓋内圧が亢進してしまう疾患に対する小児のシャント交換術を見学した。以前から留置していたシャントが閉塞してしまったため交換するとのことだった。また、原因不明の仮性嚢胞が腹部に存在していた。初めて聞いた病名で、異国の地で新しい症例を経験できたことが新鮮だった。また、最後に重度の水頭症の症例を見させていただき、自分が想像していたよりもはるかに大きくなった小児の頭部をみて大変驚いた。

③AIMC 見学

日本における放射線科にあたる部門で、MRI や CT の設備を見学し、説明を受けた。造影剤や画像診断に使う器具など詳細に解説していただいた。サイバーナイフの機械も見せていただき、マヒドン大学はタイの医療において最後の砦であるため多額の資金が注ぎ込まれており、本機械ももう一大

来年度に導入予定であると説明され、タイの医療におけるマヒドン大学のプレゼンスの大きさを感
じた。

④MIND 見学

医学と工学が融合する分野を研究する機関で、主に 3D プリンターによる人体模型の作成やそれ
に関する研究を医学部と工学部が共同して行なっていた。最初に骨肉腫患者に対して人工の関節を作
成、適応させることができるなど、模型の作成、応用についてのショートレクチャーを受けたの
ち、実際に 3D プリンターで作成しているところを見学させていただき、模型に触らせていただい
た。立体的に臓器を見られるため構造がわかりやすく、医学教育に使えばとても便利なのではない
だろうかと感じた。

⑤OPD 見学

外来患者の診察を見学させていただいた。医学部の四年生が実際の患者さんを医療面接から身体診
察まで行なっていて、上級医の先生がそれを見てアドバイスやフィードバックを行い、最終的な診
断、検査、処方を行っていた。最初の簡単な面接、診察だけとはいえ自分と同じ学年の医学生がす
でに実際の患者さんを目の前にカルテまで打ち込んでいるのを見て大変驚いた。自分はまだ模擬患
者に決められた質問を行なっただけで、OSCE もそれを事務的に行うことで通ってしまう日本の
医学教育の遅れを感じた。

⑥CNMI 見学

数年前にできたばかりの新しいキャンパスで大変広大でレンタサイクルや無料シャトルバスが頻繁
に走っていた。シミュレーション室が豊富にあり、外傷や分娩まで様々なシチュエーションを想定
した人形が設置してあった。また、様々な症例に対して検査や治療を行えるシミュレーションゲー
ムもあり楽しく学ぶことができた。これを医学教育に導入すればディスカッションしながら皆で協
力して医学を学べるのではないかと思った。現地学生とバスケットボールを通じて交流した。

⑦観光

バンコク及びパタヤで現地の学生に様々な観光地を案内していただいた。Wat Jang や Wat Phra Kaew
などの寺院を見てタイの仏教に対する信仰心の厚さや建築の多様性を感じた。国民の 9 割以上が仏
教徒と聞いて、これほどまでに仏教建築に多大なお金と時間を注ぎ込んでいることに納得した。ま
た、タイ王宮は大変広大で西欧文化と融合した建築が多々ありその雄大さに感動した。タイでは不
敬罪が存在し、国民は王家を大変敬っていると説明された。素朴とも言える日本の皇居と比較して
異文化や国民性の違いを肌で感じた。Museum Siam ではタイの歴史を学んだ。現地の学生たちは皆
自国の歴史に精通しておりとても詳細に我々に説明していただいた。日本史をそこまで勉強してこ
なかった自分と照らし合わせると歴史を重んじるタイの学生やタイの社会科教育の凄さを感じた。
また、アイコンサイアムという日本では見たことのないほど大きな商業施設では現代テクノロジー
を駆使した噴水ショーなどタイの最先端を見ることができた。他にもマッサージや日々の食事、パ
タヤのビーチなど全ての時間において日本との文化の差異を大変感じることもできた。広大な中華
街など総じてタイには外国人が多く存在し、特にパタヤではアジア人よりも白人の方が多いほどで
あった。

4.成果

先述の通りタイは観光大国で多様な人種や文化が入り混じっていた。それによってタイ人、特に現地の学生は皆英語が堪能で留学経験も豊富であり、国際的な視野を持っていた。本実習を通じて自身の英語力の低さを痛感した。何度も質問を聞き返し、微妙な受け答えとなってしまうことが多々あった。文法やリーディングに重きをおく日本の英語教育の限界を感じると共にリスニングやスピーキングのスキルを磨こうという良い動機づけとなった。また、日本国外にも目を向けて USMLE はじめ医学英語をもっと勉強していこうと感じた。

医学生による医療診察、VR を用いた医学教育など日本よりも進んでいるタイの医学教育の一端を見ることができた。タイでは医学教育は全て英語で行われているとのことで、日本の遅れをひしひしと感じた。しかし母国語で高等教育を学べるということは先人の翻訳、研究など努力の賜物であり、日本の先進度合いを同時に示すものでもあり、また患者さんに対しては英語を用いることができないため、母国語が重要となることを考えると、一概に英語一辺倒の教育にメリットだけがあるわけではないのかもしれないと感じた。

しかし、基本はレジデントが治療を担当し上級医はアドバイスするというタイのスタンスは学ぶべきものがあり、日本は安全志向がゆえに若者がより深く治療に携わる機会が少ないのではないかと感じた。医学生にも診察させるなどより早期に医療に参加させる試みの大切さを実感した。

最後に、タイの学生への支援の手厚さも感じた。マヒドン大学の新築の寮はとても広大でジムや体育館、多目的ホールからプールまで備え付けられていてかつ家賃は無料とのことであった。また、各種施設の職員も大変歓迎していただき我々の要望に沿って充実した実習を提供したいという考えを持っておられた。日本では大学の運営と学生との間に距離があるように感じるため、両者がもっと歩み寄ってより良い大学づくりに貢献していくことを願う。

5.今後の抱負

今年 6 月に今回交流したマヒドン大学医学部学生メンバーを次は阪大がホストとなって受け入れる予定であり、それまでに今回痛感した自身の英語力の無さを少しでも軽減するべく日々の英会話や IETS の勉強により一層集中していきたいと思う。また、医学について説明、ディスカッションできるようになるべく USMLE の勉強を通じて医学英語にも精通したいと思う。

6.謝辞

今回の大阪大学・マヒドン大学の交換留学を行うにあたって、ご協力くださったマヒドン大学の教職員の方々、現地学生メンバー、そして毎年当プログラムを岸本国際奨学金に採択してくださる岸本忠三先生ならびに関係者の皆様に、心からの感謝を申し上げます。

令和5年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

大阪大学医学部医学科 4年 ***** H・A

【参加メンバー】

大阪大学医学部医学科 4年三名 3年二名 計五名

【海外活動期間】

令和6年2月29日～令和6年3月4日

【渡航先および受け入れ機関名】

タイ・バンコク

マヒドン大学医学部ラーマティボディー病院

(Mahidol University Faculty of Medicine Ramathibodi Hospital)

【スケジュール】

いずれもタイ・マヒドン大学の学生と訪問・交流

2月29日 関西国際空港発、スワンナブーム国際空港着、ウェルカムパーティー

3月1日 Ramathibodi (ラーマティボディー) 病院 午前回診による病棟見学、手術見学、CT/MRI 見学、見学、MIND (Medical Innovations Development) Center 見学、AIMC (Advanced Diagnostic Imaging Center) 見学、サイバーナイフ見学
RIVER CITY 見学、アジアティークザリバーフロント見学、Siam 周辺散策

3月2日 Wat Arun 見学、The Grand Palace 見学、ミュージアムオブサイアム見学、
ナイトマーケット散策

3月3日 Pattaya(パタヤ)、ラン島散策

3月4日 Siriraj (シリラート) 病院 外来見学、解剖学教室見学、CNMI(Chakri Naruebodindra Medical Institute) 見学(シミュレーションを用いた医学教育体験)、Farewell Party

(3月5日 関西国際空港着)

【目的】

本活動は、発展著しいタイにおいて、タイ国内随一との呼び声の高い大学の医療施設の見学を通して、タイにおける医療の現状を学ぶとともに、タイの文化に触れることにより、国際感覚を養うことを目的としている。また、一連のプログラムにおけるマヒドン大学医学生徒のコミュニケーションを通じて、大阪大学とマヒドン大学の国際交流と互いへの理解を深めることを目的とする。

【内容】

このプログラムは大阪大学国際医療研究会がタイ・マヒドン大学医学部と行っている交換留学プログラムである。この度大阪大学の学生がタイに招かれ、マヒドン大学の医学生に案内してもらいながら、マヒドン大学医学部やバンコク周辺の医療施設見学などを行っている。同様に、2024年6月に1週間程度、来日したマヒドン大学の医学生の大阪大学附属病院における実習や、大阪大学の研究施設見学等を企画し、日本における先端医療や先端研究を学んでもらう機会としている。また、大阪でのホームステイ先の手配や京都・大阪・奈良などの案内も行っており、タイの学生にとっては日本の風土や文化・歴史を感じられるものとなっている。

タイと日本の学生同士が相互に協力しあって、有意義な交流を行っており、友好な関係を継続している。

【活動報告】

1. マヒドン大学 Ramathibodi 病院

(1) 病棟（救急科）

私達が見学した救急科は緊急度が高い患者とはまた別の、中等度の患者が入院する部屋で、タイの先生に一つ一つの症例を紹介していただきながら朝の回診として問診・触診を行う様子を見学した。慢性腎不全や薬疹など、多くの症例を見学することができた。紙カルテで管理されており、一人の患者に対して作られた分厚い冊子を見せていただき、電子カルテの便利さを確認した。

(2) 手術室見学

手術室では、私達も手術着に着替え、手術を行う様子を見学させていただいた。印象的だったのは水頭症の幼児で、頭が大きく膨れ上がっている様子は想像以上であった。医師も、これほど大きな症例は珍しいとおっしゃっていた。また、水頭症の治療に関して学んだり、頭蓋内圧を逃がすために腹腔内に繋げるチューブの交換をしたりする様子も見学できた。

(3) CT/MRI 見学

ラーマティボディー病院には CT と MRI が二台ずつあると伺った。実際の同意書を見せていただき、その点は日本と大差ないと感じた。

(4) サイバーナイフ見学

サイバーナイフで腫瘍を治療する施設を見学した。実際にロボットの近くまで行き、それぞれのパネルやディスプレイの意味も教えていただいた。また、実際に脊柱の腫瘍を治療する様子を別室から見学した。

(5) Medical Innovations Development Center (MIND Center) 見学

MIND は、医学部・工学部・理学部が共同することで、医療に必要な機器を 3D プリンターなどを用いて作り出したり、研究開発を行ったりする施設である。シリコン樹脂などで作り出された模型は、医療学生の学びに使われるだけでなく、治療困難な例でシミュレーションを行うためにも使われており、実際小児の心臓の小ささを手で触れることで外科的介入の難しさを知った。



2. マヒドン大学 Shiriraj 病院

ここ二年で新しくできたということで、とても開放的で綺麗な施設だった。学生が集ったり自習できたりする場が多く設けられており、学ぶのに心地の良い環境だと思った。

(1) 外来見学

外来の様子を部屋の外から見学した。私と同じ学部4年生が診察を行い、診断まで考えている様子に印象を受けた。患者と医師の会話はタイ語で分からないことが多かったが、先生方が丁寧に教えてくださり、めまいを主訴とする患者の鑑別の方法まで解説してくださった。

(2) シミュレーションセンター

ここでは、学生たちの演習、シミュレーション教育に使用する設備を見学した。CPRを行える部屋だけでなく、手術室を模した部屋、外来を模した部屋、入院病棟を模した部屋などがあり、学生が臨床の場に出る前にどのように動けばいいのかを学ぶ機会が与えられていた。特に手術室の部屋では、出産時に妊婦から乳児を取り上げることも経験でき、その様子をマジックミラー越しの隣室より観察、評価することができた。実際に患者対応のトレーニングをする学生は緊張するそうだが、実習として臨床の場に出る前に演習できるのはとても有意義だと思った。他にも、患者が電子パネルに映し出され、主訴や症状が与えられ、何を問診するか、どんな検査をするか、どんな薬を投入するかを考えゲームのように選択していくシミュレーションもあり、実際に行ってみたところ、救急の患者が亡くなってしまう結末となってしまう、勉強が必要だと感じた。このように、楽しみながら学ぶ意欲を掻き立てるのは良い教育機器だと思った。

(3) 解剖学教室

解剖学教室では、実際にすべての骨が展示されていたり、教師が綺麗に解剖した状態の実際のご遺体が置いてあったりし、学生は常に自分たちの行った解剖と照らし合わせて勉強に役立てることができる仕組みであった。また、展示されている骨は家に持って帰って自学に役立てても良いと聞いた。解剖の授業の前にはテレビにて大学が作成した解説動画を視聴し、解剖を進める。考察しながら解剖を学び、また基本的な姿と照らし合わせることができるのは良い仕組みだと思った。また、VRを用いて、解剖を現実世界に映し出せる機器では。臓器をつまんで取り出したり拡大したりすることができ、どうしても紙面では勉強では平面的になってしまう解剖を3Dで学べるのが興味深かった。



3. バンコク周辺でのマヒドン大学の学生との交流、寺院や博物館の見学

実習後や週末は、タイの学生に Wat Arun や The Grand Palace などの寺院に連れて行ってもらい、タイの仏教文化を感じることができた。また、ミュージアムオブサイアムという博物館では、タイの歴史や文化について、展示品を回りながら学び感じることができた。いずれもタイの学生が親切に様々なことを教えてくださり、日本の文化との違いも感じながらタイのことについて知識を深めることができた。初めは緊張もあった私達だが、最終日のフェアウェルパーティーではお互い何でも話せる関係になっており、他国の医学生と多く話し交流を持つことができた貴重な機会だと改めて考えた。

【感想】

海外の病院や医療制度を見学するのは初めての機会だったが、日本と変わらない点に気づくこともあれば、紙カルテによる問診の形態の違い、施設の違いなど病院の文化を見学し、触れることができたのは貴重な経験となった。特に印象的だったのは教育システムで、上述した解剖学教室やシミュレーションセンターのように、学生が自ら学べる環境や、最新技術を用いて想像しやすく実践的に学べる場は、教育の場として羨ましくも思い、今後の日本での教育に活かせる点もあるのではないかと考えた。タイの学生との交流を通してタイのことを多く教えていただいたため、彼らが来日したときは、日本の医療について英語で説明できるよう、私自身も更に精進してまいりたいと決意を固めた。

【謝辞】

最後になりましたが、この度実習にお理解いただき、寄付金をご支援いただきました、岸本忠三大阪大学名誉教授をはじめ、岸本国際交流奨学金の関係者の方々、このような機会を設けてくださった方々、今年度までマヒドン大学との交流関係を続けてきてくださった方々、全ての方に心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

国際医療研究会マヒドン大学交換留学の報告書
2024/2/29~2024/3/4 Mahidol University

大阪大学医学部医学科 4 年 T・T

1. スケジュール

以下のようなスケジュールで過ごした。それぞれ活動の詳細は3に書いてある。

- 2/29 スワンナプーム空港到着
- 3/1 救急科、サイバーナイフを見学、画像診断科の見学、3d プリンターの見学
- 3/2 寺院巡り、タイマッサージ
- 3/3 パタヤ
- 3/4 CNMI キャンパスでシュミレーションラーニング、病院で問診の見学

2. 目的

病院の見学を通じて、タイの医療状況を学び、日本とタイの医療の違いを学ぶ。
また、社会見学や様々な人々との交流を通じてタイの文化や日本とタイの文化の違いを学ぶ。

3. 活動内容

(1) Ramathibodi 病院見学

1 救急科

ここでは、救急の入院患者を見ていた。
ちょうど朝だったので、ナースがご飯を持ってきてくれるのをみれた。
日本とはほとんど同じような症例を見ることができたが、カルテが電子カルテではなく、紙媒体だったので驚いた。

2 画像診断科

ここでは、CT や MRI を用いた画像診断を行っていた。
MRI では磁力と電波を利用して人体の断面を撮影することができ、その原理について詳しく教えていただいた。

3 サイバーナイフの見学

サイバーナイフという放射線治療の医療機器を見せてもらった。サイバーナイフは手術の難しい腫瘍を治療することができる。その上侵襲性が低いこともメリットの一つである。またサイバーナイフを頭部に使うときには、頭部を固定する必要がある、そのために患者一人一人にあわせて形状記憶プラスチックで固定用のマスクを作るのだが、すでにベッドに一つあって誰のかが気になった。昔は作ってもらってたらしいのだが、そんな時間はなかった。

4 手術室見学

実際に手術を何件か見学させてもらった。日本と一緒に手術着を着て回った。特に印象的だったのは、水頭症の症例で、これまで写真で見たものよりも何倍も大きかった。治療法に関して教えてもらったり、頭蓋内圧を逃すためのチューブ交換なども見させてもらえた。

5 3d プリンターの見学

臓器を 3d プリンターで印刷して、学生や手術を担当する医師などが術前にシュミレーションしたりするための部署に行った。使われる素材や、目的、実

際にプリントされたものを見してもらったりもした。

マヒドン大学 Shiriraj 病院

このキャンパスはここ 2 年でできたということもあり、トテモ開放的で綺麗だった。自習スペースや寮にバスケットゴールがあったりと自由な雰囲気ですトテモ羨ましかった。

6 病理法医学科

病理法医学科では、病理解剖や司法解剖を行っており、また臓器などのホルマリン漬けも行っていた。自分たちが特に記憶に残ったのはバーチャルメガネをかけてアトラスを見れたことだった。まずそれをつけると、検体が浮かび上がっていて、それを切り取ったり、拡大したり中に入ったりすることができた。

7 シュミレーションセンター

ここでは、学生の演習に使用するためのシュミレーション部屋を見学した。CPR を行う部屋や、小児の CPR を行える部屋もあった。それ以外にも、手術室、外来、入院病棟、分娩室、のシュミレーションを行える部屋がたくさんあった。実際の臨床に入る前にこういうことができるのはいいなと思った。分娩室は、妊婦から乳児を取り上げる経験もできるようだった。それをマジックミラーの隣の部屋でオペレイトする様子も見れた。他にも、患者が電子パネルに映し出され、主訴や症状が与えられて問診や検査をどのように行えるかを選択して治療するシュミレーションもあった。実際にやってみたところ、患者がなくなってしまう、難しさを感じた。楽しみながら学べてトテモ良いなと思った。

8 外来見学

外来の様子を後ろから見させてもらった。タイでは、私たちと同じ 4 回生が、診察を行っていた。患者との会話は分からなかったが、後から指導の先生が丁寧に教えてくれた。頭位を変えるとめまいがする症状の人が来ていて教科書で見たやつだと感動した。

(2) 社会見学

1 ワット・ポー、ワット・プラケーオを見学した。

ワット・プラケーオはとても大きく荘厳な寺院であった。ヒンドゥー教と仏教を混ぜたタイの神話の巨人や天使を行ったモチーフが各所に見られた。全体的に日本の寺院とは異なりきらびやかな装飾が施されていた。ワットポーはタイ古式マッサージの起源であり、とても大きな大仏があった。タイの子達は全体的にとっても信心深く、基本的にみんな仏教を信じているように見えた。きちんとお祈りをして、仏を大切にしているように伺えた。日本人は本格的に仏教を信仰している人はそこまで多くないので、不思議な感じがした。

2 タイ古式マッサージ

寺院の近くにタイ古式マッサージの学校があり、その付近でタイ古式マッサージを受けた。タイ古式マッサージの聖地のような場所であったため、個人でこれまで行ったタイ古式マッサージと比べると段違いでよかった気がした。タイ古式マッサージは、施術者が、体全体を使って行う施術でありアクロバティックな体勢になったりもする。しかも日本と比べると半額でもなかなかいい店に行けたりとコストパフォーマンスは最強であった。

3 ミュージックオブサイアム

タイの歴史や文化が知れる博物館である。ラマ王の歴代の政策、墓、顔などが展示されており、タイの学生が丁寧にそれぞれ教えてくれたりした。日本の文化との違いも感じる事ができ、知識を深めることができた

4 パタヤ

パタヤに行き、海水浴などを行った。バナナボートに乗ったりもした。バナナボートは沖縄で一度乗ったことがあったが、沖縄は安全意識で、そこまでのスピードは出さず、絶対落ちないような運転だったのだが、このバナナボートはスピードも最速で、最後にはわざと落ちるように転覆もさせてきた、トテモ楽しかったが、少し自分の命の危機を感じた。カヤックにも乗ったりした。たくさんの海水浴客がいた。海水は綺麗で、気候もちょうどよかった。

4. 感想

タイの学生と交流して、1 番驚いたことがタイの学生はとても英語が上手だったことである。交換留学に参加した学生だけでなく、いろんな学生と交流したが、タイの学生は英語が堪能な学生がとても多かった。が、タイの交換留学に選ばれた学生は、この留学プログラムが人気のおかげか、選りすぐりの人材が選ばれているようだった。

なぜそんなに英語が上手なのかと聞いたら、タイではタイ語の医療用語がないらしく、英語で医学を勉強しているらしい。また、小さい頃から英語の授業とかを受けている子が多いようだった。現地の人で英語を喋る人は、タイ人特有の訛りが強く、聞き取りにくかったのだが、彼女ら学生は全然そんなことはなく、トテモ聞き取りやすかった。が彼らと比べると日本人は海外留学に申し込んできた人たちなのに貧弱な英語だったと言わざるを得ない。

英語はもともと苦手で、喋るのが億劫になっていたのだが、5日間彼女らとしゃべったおかげで臆せず英語を発せられるようになった。発音などがまだまだのため、まで伝わりにくいところもあった。要勉強である。

医学の勉強をしていると、よく英語ができればなぁとすることが多々ある。少し前、病院実習で、馬蹄腎の腎損傷の患者がいて、なかなか症例のため、治療法が海外の論文でしかなく、これで英語ができないとと感じた。AIが発達してきて、翻訳の技術は上がってはいるが、やっぱり毎回齟齬が発生しているようにおもう。将来のためにも英語の勉強が必要と感じた。

5. 抱負

タイの学生と交流することで世界に通用する医療者を育てることはとても大事なことでとおもった。彼らは外の世界に目を向けている。私も英語の勉強をして、世界の人と交流したいと思う。広い世界に目を向けて、これからの医療を考えたいと思った。

6. 謝辞

最後になりますが、この度実習の機会をいただき大変ありがとうございます。寄付金をご支援いただく岸本国際交流奨学金の関係者の方々、機会をくださった方々に心よりお礼申し上げます。

タイへの交換留学のご報告

大阪大学医学部医学科3年 O・Y

[参加メンバー]

大阪大学医学部医学科

4回生 3名、3回生 2名 計5名

[海外活動期間]

2024/2/29～2024/3/4

[渡航先・受け入れ機関]

タイ・Mahidol University Faculty of Medicine Ramathibodi Hospital

[目的]

タイ屈指の医学生が集うマヒドン大学において、タイの医療の仕組みやタイの医学生の学び方に触れること、そして現地の学生との国際的な交流を深めることを目的とした。

[活動]

マヒドン大学 Ramathibodi 病院

・入院病床の見学(救急)

現地の救急の先生が一つ一つのベッドを回りながら、症例を紹介してくださった。指導医の先生のもと、研修医の先生が実際に問診や触診、カルテを書く姿を見学することができた。緊急度はそれほど高くはない患者が集まっているエリアだったが、腎臓の機能障害やかぶれに対して処方された薬による薬疹など様々な症例を見学することができた。

見学の中で最も驚いたこととしては、まだ病棟の中では紙カルテが使われているということだった。一部は電子カルテにはなっているものの、紙カルテがベースとなっているため、電子カルテへの書き換えが大変だったりカルテが破れたりするといったように不便さがあると感じた。

・放射線科の見学

CT や MRI に関しては日本と同じようなもので、同意書についても大差ないことが分かった。

また、そのほかにサイバーナイフを用いた治療を行う施設も見学したが、その部分では日本の方が機会自体の導入も早く、先生も実際に日本で学んだということだった。

・手術室の見学

現地の研修医の先生にも付き添ってもらいながら手術見学をした。日本では珍しい、水頭症の幼児の患者を見させてもらったが、想像していた以上の頭の膨らみ方に驚いたとともに、宗教的な要因でその状態になるまで手術を拒んでいたということにも日本との違いを感じた。

・MIND Center 見学

医学部・工学部・理学部の共同機関で、3D プリンターなどで心臓をはじめとする各臓器のモデルなどが、医療者への教育や研究などのために作成されていた。実際の患者の臓器も作れることから、治療の方針決めにも役立っている、など日本との違いも感じた。

マヒドン大学 Shiriraj 病院

・外来の見学

外来の様子を見させていただくとともに、指導医の先生によるめまいの鑑別のプロセスなど教えていただいた。一番印象的だったのは、4 回生の時点で患者さん相手に外来を行っているということだった。確かに、問診の前に患者さんが訴える病状からさまざまな病気を検討し、診断をつけていくためには事前の膨大な準備が必要で、そのプロセスの中でさらに知識が身についていくだろうからとても良い環境だなと感じた。

・シミュレーションセンターの見学

CPR や手術室などシミュレーションのバリエーションも豊富で、学生が病院に入るまでにそのようなシミュレーションを行えるのはとても魅力的だと思った。シミュレーションの内容も充実しているので臨床現場に即して実習できる環境が整っていると感じた。たくさんあるシミュレーションの中で最も興味があったのは、実際の患者の症状などがパネルに映し出されて、検査や治療をすることでその患者を救うという、ゲーム感覚で学べるシミュレーション機器だった。ゲーム感覚で学べると学習意欲も増すうえ、その中でもかなり本格的なものだったのでとても有効な機械だと思った。

・解剖学の授業教室、授業で使われている機器の見学

教授が実際に解剖したご献体が勉強用に展示されており、また、解剖の授業前や解剖の実習中は教授による解説のビデオを見ながらするということがあった。他にもアトラスをパソコンに読み取り、3D 眼鏡によって立体的に見ることができるようになっていた。さらには、VR によって臓器などを目の前の空間に映し出すことで、こちらも三次元的な学習ができる機械となっていた。

バンコク周辺の街の見学

実習の合間にバンコクの寺院や博物館などに連れて行ってもらった。その中でタイの歴史や文化に触れることができた。交通手段としてもチャオプラヤ川など大きな河川を用いた船による移動など、日本との違いを肌で感じることもできた。タイ料理にも挑戦し、タイの人が好む味付けなども知ることができた。

[感想]

マヒドン大学はタイ国内でも屈指の医学部ということもあり、学生のレベルの高さに驚かされた。たとえば、解剖の授業教室は夜 10 時まで解放されており、テスト前など気になる時にいつでも入り、先生がきれいに解剖しているご献体を直接見に行けるというように、学生の意識の高さがうかがえる環境となっていた。また、マヒドン大学のキャンパスの違いは阪大と同じように学年によるものだとわかり、その点においては親近感を覚えた。

シミュレーションセンターの規模の大きさと設備の充実度には大変驚かされた。また、

タイでは、日本よりもシミュレーションを使う機会が多いように感じた。シミュレーションの短所も踏まえつつ、長所を生かしていけばさらに医療、医学教育は発展していくのかなと感じた。

個人的には、英語を聞き取るという点はあまり問題なかったと思うが、自分で意見を発信するということや自ら話すという姿勢が足りないと感じた。これから徐々にでもその課題を克服していきたい。そのためにも、タイの学生は6月あたりに日本を訪れる予定となっているので、もう少し積極的に、日本の医療や文化を紹介できるよう準備していきたい。この留学で海外への興味もさらに増したので、その選択肢を消すことがないようにこれから頑張りたいと思う。

最後になりましたが、交換留学という貴重な機会をいただけたことに感謝するとともに、この留学に関わってくださった全ての方に御礼申し上げます。

令和5年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

令和6年3月13日

タイにおける交換留学プログラム・短期研修のご報告

大阪大学医学部医学科3年 I・G

【参加メンバー】

大阪大学医学部医学科 4年三名 3年二名 計五名

【海外活動期間】

令和6年2月29日～令和6年3月4日

【渡航先および受け入れ機関名】

タイ・バンコク

マヒドン大学医学部ラーマティボディー病院

(Mahidol University Faculty of Medicine Ramathibodi Hospital)

【スケジュール】

いずれもタイ・マヒドン大学の学生と訪問・交流

2月29日 関西国際空港発、スワンナブーム国際空港着、ウェルカムパーティー

3月1日 Ramathibodi (ラーマティボディー) 病院 救急科見学、手術室見学、CT/MRI 見学、サイバーナイフ見学、MIND 見学

RIVER CITY 見学、アジアティークザリバーフロント見学、Siam 周辺散策

3月2日 Wat Arun 見学、The Grand Palace 見学、ミュージアムオブサイアム見学、
ナイトマーケット散策

3月3日 Pattaya(パタヤ)、ラン島散策

3月4日 Siriraj (シリラート) 病院 外来見学、解剖学教室見学

(3月5日 関西国際空港着)

【目的】

本プログラムは、発展が著しいタイにおける先進的な医療施設を視察することで、同国の医療環境を理解し、かつ、日本での学びを刺激する経験を得ることである。さらに、タイの

豊かな文化に触れ合うことで、参加者が視野を広げ、グローバルに活躍するための土台を築くことにつながる。

【内容】

大阪大学国際医療研究会とマヒドン大学医学部が共同でおこなう交換留学プログラムの一環である。大阪大学の学生はタイを訪れ、マヒドン大学の選抜された医学生と交流し、マヒドン大学の医療施設を見学する。マヒドン大学の医学生が日本を訪れる際には、一週間ほど滞在し、ホームステイ、最先端の医療と研究を学ぶ。

【活動報告】

1. マヒドン大学 Ramathibodi 病院

(1) 病棟（救急科）

中等度の患者が来る病棟を見学し、医師に案内、説明していただいた。アレルギーへの対処が重要であるため、薬剤の管理を徹底していた。管理方法は、ほとんど紙のカルテであり、電子カルテのような手軽さはない反面、他の部署の医師が患者を見たときに、共有したいことをすぐに書き込めるのはメリットだと感じた。

(2) 手術室見学

手術室では、手術着に着替え、すぐそばで見学させていただいた。ファイバー症候群という、縫合線の早期癒合を示す難病の手術をおこなっており、脳外科に加えて、小児科や、形成外科が合同で手術を行っていた。他には、水頭症の手術をおこなっていたが、母親が手術を拒んだ結果、かなり頭部が肥大化していたという珍しい事例があった。

(3)CT/MRI 見学

日本で一般的に用いられている CT や MRI があった。タイでは台数が少ないらしい。

(4) サイバーナイフ見学

サイバーナイフで腫瘍を治療する施設を見学した。実際にロボットの近くまで行き、それぞれのパネルやディスプレイの意味も教えていただいた。また、実際に脊柱の腫瘍を治療する様子を別室から見学した。

(5) Medical Innovations Development Center (MIND Center)見学

医療機器の開発を目指す研究施設。3D プリント技術によって作成された模型は、手術計画や、学生の教育のために用いられている。日本でも基礎医学の段階で用いると効果的だと感じた。タイでは、医学生が 1 年かけてエンジニアリングを学び、学位をとることができるらしく、そういった人材が重要視されていると知り、興味深く感じた。

2. マヒドン大学 Shiriraj 病院

かなり、スペースに余裕がある施設だった。清潔感があり、患者のストレスはすくないだろうと感じた。

(1) 外来見学

4 年生の生徒が実際の患者を相手にして診察していた。日本では、疑似患者らしいので、そういった経験は貴重だと感じた。

私が見学した患者は腹痛で、薬剤による副作用が原因だと思われた。学生相手でも患者が訴えるなどといったのが印象的だった。

(2) シミュレーションセンター

アメリカ産のシミュレーション人形を用いて、手術、病棟でのシミュレーションを行ったり、電子パネルを用いた、手術のシミュレーターがある施設を見学した。

施設が大きく、診察室だけで 12 室あったので、タイの医学生教育にかかる重みを感じた。シミュレーションを早い学年からしていれば、臨床実習のときに、より高いレベルのことを学べるので、日本でもほしいと感じた

(3) 解剖学教室

タイで発展している解剖学の教室を見学した。特に印象的だったのが、人体の構造を手で操作できる VR。かなり立体的に、構造が見れて、思い返すと日本では、平面でしか解剖学をまなべなかった(実習を除く)ので、日本でも導入したいと感じた。

3. バンコク周辺でのマヒドン大学の学生との交流

様々な名所を案内してもらった。どこにいてもタイ人は親切で、日本以上に親切なのではないかと感じた。

【感想】

この交流プログラムは、目の当たりにしたタイの医学生教育と暖かな文化に深い感銘を受ける経験だった。特に、早い段階での実践診療、3D モデルやシミュレーションセンターでの教育は、医学生段階で、臨床の意識が高まる素晴らしい制度だと感じた。タイでは、日本に比べると医師不足が顕著で、それもあってか、医学生教育の質が高く、日本でも質を重視していくのが今後必要だと感じた。

【謝辞】

このような素晴らしい機会を提供していただいた全ての関係者、特に奨学金を提供していただいた岸本基金には、心からの感謝を申し上げます。この経験は、医学的なモチベーションの向上、視野の拡大はもちろん、異国の地で異なる文化の人々と関わるという今までなかった経験ができ、個人的な成長にも大きく貢献しました。

本当にありがとうございました。